

大野 僚著

## 『上田薫の人間形成論』

—新しい教育言説の誕生—

藤 井 千 春

上田薫は人間形成に関する独自の教育哲学を展開した。教育哲学や教育思想に関する研究者ではなく、教育に関する自己の哲学の構築を遂げた字義通の教育哲学者である。

しかし、上田の教育哲学を正面に据えた体系的な研究書はなかった。正直なところ、上田の教育哲学は、次のような理由から学術的な研究対象としては取り上げにくい。

すなわち、第一に上田はなお同時代の教育哲学者である。

上田の哲学は、現在でも教育実践を励まして導く、教師たちの精神的な支柱であり続けている。上田の哲学は、教師としての生き方を支えており、多くの教師たちにとって精神的な帰依所である。上田の哲学にはいまだにそのような同時代性があり、研究対象とするには生々しさがあまりすぎる。

第二に、上田自身がどのようにして自己の教育哲学を構築したのか、上田の著作にはその学説史的な足跡が述べられていない。上田が先行哲学者について分析・検討・考察を行っ

た著作は存在していない。確かに上田の哲学は、具体的な教師の具体的な教育実践という、具体的に個性的な活動を出発点としている。そして、具体的に個性的な活動へと活かされることをめざしている。具体から具体への哲学であり、個性的な実践を支えることを役割とする哲学である。具体的に個性的な実践を支える哲学であるならば、上田自身は自分の哲学が哲学史の流れの中に位置付けられ、評価されることをめざしたわけではないだろう。しかし、例えば、祖父の西田幾多郎の哲学をどのように継承したのか、ヘーゲルやデューイをどのように読んだのか、ハイデガーなどの実存哲学にどのように触れたのか——などは、やはり気になる。上田の文章の諸々にそれらの哲学との類似性が見出される。しかし、上田はそれらの哲学との関連性を明確には述べていない。

第三に上田の哲学的主張と論述スタイルとの矛盾である。

宇佐美寛は「氏の論理は、旧い哲学の実念論的言語主義の言語形式においてなされているので、論理的に背理を生じ、経験的なものの重視は中途はんばなままに終わらざるを得ない」と評している（『教育』において「思考」とは何か）明治図書、一九八五年、五十六頁）。上田の文章には、経験主義を主張しながらも実念論的な非経験的な論述スタイルが多い。この点で論理的な分析を困難にしている。分析哲学の論点に

即して言えば、「無意味な文」が多い。本著に寄せられた「発展をねがうことば」で、上田自身は次のように述べている。「私の場合はそれに加えてその思想的立場が個性的というか、わくを外れることが多かったため、一般に通用する学理的処理だけではすこぶるとらえにくいということである。それはあるいは内容が学的な明解さを欠くということだったかもしれないけど、それよりとにかくつねに個性的なものを生かすことに執しぬいたということのためであつたらう」。

大野氏が上田の人間形成論を学術的な研究対象として、上田の教育哲学に正面から取り組んだことに心から敬意を表したい。

本著では、「解釈学の方法論であるテキスト解釈の手法を用いることによって教育的文脈を探り当て、戦後教育論の再評価に取り組み」という目的のもと、「これまで十分解明されてこなかった上田の教育論における諸概念を再び検討」すること、また「経験主義教育における経験と上田の教育思想における『経験』とを対比させ、上田の考える『経験』がいかに特殊性を有していたか、従来の教育（学）に対して差異を仕掛ける教育言説としてどのように機能しているかを明らかにすることによって、上田の教育論の再解釈」をすることが試みられている。

リ、「および「数個の論理」が検討されている。そして、上田の哲学が現実の世界における具体的で個性的な人間形成のための論理であったことが明らかにされている。

「第五章 認識の変容に対する言語的戦略」では、上田の教育言説が詩的な表現を駆使して構成されていると述べられ、上田の論述スタイルがケネス・バークの文体論を手がかりにして、レトリック論的な観点から分析されている。そして上田の論述が、「意味論的理想」という説明的な言説よりも、説得に重きを置いている『詩的理想』としての言説によって構成されている」ことが明らかにされている。

第二章と第五章は、評価することができる。

上田の教育哲学の基盤は、個性的な現実に立脚した認識論にある。上田の認識論を際立たせたのは、昭和三十年代に『教育』誌で展開された「上田—大槻論争」であつた。これは上田と教育科学研究会の大槻健たちとの間で連続的に行われた論争である。上田の認識論とマルクス主義哲学との間でそれぞれの認識論の特色と主張、また相違と対立点を際立たせる論争となつた。上田の認識論は、従来、マルクス主義哲学との対立においてその経験主義的な特色が明らかにされてきた。その点で、上田にとつての存在論の意味を問い、そこから上田の認識論の意味とその位置を明らかにしたアプロ

「第一章 『戦後』経験主義教育論争」では、梅根悟、広岡亮蔵、森昭の所論、およびそれに対する上田の批判が取り上げられている。そして、梅根、広岡、森との対比によって、終戦直後期における上田の教育哲学の特色が明らかされている。

「第二章 上田教育論研究の課題」では、小川正が上田教育哲学についての先行研究者として取り上げられている。そして、上田の論点が認識論から存在論へと変化しているとする小川の解釈に対する批判的な検討がなされている。大野氏は、上田にとつての関心と主題は「人間」と「事実」が持つ『可能性の世界』であり、「存在」よりは行為的実践的な動的場面を説明する形成の『論理』こそが重要であつたと論じている。

「第三章 上田薫の教育思想解釈」では、上田の社会科学教育論と道徳教育論が取り上げられている。そして、上田の知識論を手がかりに単元学習や問題解決学習の特徴が分析されている。それによって「動的相対主義」「ずれによる創造」「解決の未決定性」など、上田の教育哲学を構成する中心的概念を理解していく観点が明らかにされている。

「第四章 人間形成の論理」では、上田の「動的相対主義の論理法則」としての「AハAナラザラントスルユエニAナチは新しい。

また、上田の教育言説をレトリック論的な観点から分析するアプローチは、実念論的言語主義と批判された上田の論述スタイルの価値を明らかにしている。上田の教育哲学における論述スタイルを新しい観点から分析し、その価値を独創的に明らかにしている。

ただし、二つの章とも四〇〇字原稿用紙五十枚程度での論述のため、内容的に物足りなさを感じる。それぞれのアイデアをそれだけで展開しても、一つの研究書としてまとめることができる。これら二つのテーマについては、今後の発展を大いに期待したい。

最後に今後の発展を期待して課題を指摘する。

第一に、本著は上田の教育哲学を紹介する著に留まっている。第二章、第五章に独自性は見られるものの全体的に上田の教育哲学に対する分析・検討・考察は浅い。それは各章におけるテーマが大きいにもかかわらず、各章で論述されている分量が少ないことによる。研究テーマを限定することが必要だつたのではないだろうか。このため上田の教育哲学に馴染んでいる者には、先の二つの章を除いては、なるほどと思える新しさを見つけないことはできないだろう。また、上田の教育哲学を知らない者には、教育哲学地図の中で、上田の哲

学についての納得のできる価値や位置づけを見つけることはできないだろう。

第二に、大野氏は「解釈学の方法論であるテキスト解釈の手法を用いる」と述べているものの、上田の論じた言説を上田の使用している別の言語によって説明している箇所が目につく。全体的に本著には、上田の著作からの引用と上田の使用している言葉の「つぎはぎ」というように見える箇所が多い。「解釈学的方法論であるテキスト解釈の手法」が十分に機能していると評価することはできない。この点で、哲学・思想研究としての方法になお未熟さが残されている。

第三に、「動的相対主義」についての説明はヘーゲル哲学の解説を読んでいるようであり、「数個の論理」についての説明はデュイの経験論の解説を読んでいるようである。上田がそれらの哲学をどのように理解・吸収・批判したのかについて、上田が教育哲学を發展させた問題意識に内在して解明し、それらの哲学との関連や異同において上田の論理の独自性を明らかにすることが必要である。

厳しい指摘をしたが、大野氏の今後の研究の發展を心より期待したい。

発行所 学術出版会 〒112-0002

東京都文京区大塚三ー八ー二

電話 〇三(三九四七) 九一五三

二〇一〇年五月十七日発行

ISBN 978-4-284-10242-1 C3037

B5判 一八六頁 本体価格二八〇〇円

(早稲田大学)